

「研究」佐伯荘(その四)

本荘百式拾町ノうち、古市・上岡

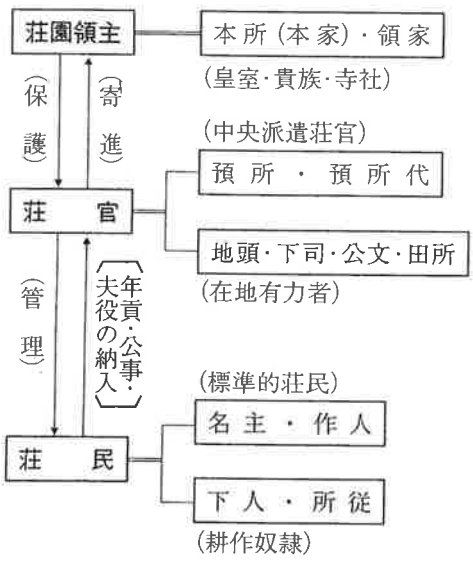
宮下良明

(会員 佐伯市古江)

豊後国岡田帳、弘安八年(一一八五)に記載されている佐伯荘百八十町は、堅田村六十町と宇目町を除く南海部郡に、津久見市を合わせた全域百二十町を佐伯本荘の荘域と見て間違いない。佐伯本荘が開発された時代は、「佐伯氏一族の興亡」を引用して先の史談で概略を祖述した。

律令時代から平安時代の豊後は、中央政府より派遣された「国司」によって統治され、国衙領(公領)のうち各郡衙に役人「郡司」が配置された。海部ノ郡穂門郷が全国荘園制の発展と共に、併行して国衙領から荘園の特権を得て立券され、皇室八条院領、智恵光院を領家と仰ぎ「戸穴庄」と命名した。その荘史は安元二年(一一七六)の八条院領目録に見えると「佐伯氏一族の興亡」は述べている。その意味から推測すれば、平安時代を通じて続

いた穂門郷は、御厨(古代・中世を通じて存在した皇室院宮、王臣家、神社の所領で主に魚介類を供祭物として献納していた)から荘園に移行されたものと考えられる。荘園には在地豪族や、地方領主から寄進されたいわゆる寄進型荘園があるが、戸穴庄の時代には開発者の氏族は見当たらない。したがって、寄進された荘園ではない。(寄進型荘園とは、在地支配者から高位、皇族、公卿、寺社等に寄進して領家と仰ぎ、自分は在地に居住して実質的に土地を支配する型のものをいう。)



したがって、大神系図、佐伯氏系図上の初代佐伯惟家、惟康は鎌倉時代初期の人物であろうから、大神系佐伯氏族は、戸穴庄立券以前には関係がなさそうである。しかし郷司的人物が居住し領家の指示に従っていたものと考えられる。

天慶の乱

いま一度歴史を振り返って見ると、天慶四年(九四一)東国では平ノ将門が反乱し、西国では伊予の掾藤原純友が豊後水道の日振島に居館を構え、海賊として時の政庁に反乱する事件が起きた。世にいう天慶の乱である。その時の史料によれば、豊後国佐伯院に純友の賊徒が乱入し、源経基ミナモトノツネキに生捕られたという有名な歴説がある。源経基の系統は毛利高政夫人福寿院(木曾氏)にも繋がっており、八幡太郎義家、源頼朝、新田義貞等の出自にも関係するので系図の大略を末尾に示した。ともあれ純友軍乱入時に見聞された佐伯院という唯一の呼称が、のちの佐伯地名考証の一つに繋がることに違論はないが、藤原純友が乱入当時の佐伯院の姿は、つぎの様なものと理解している。

佐伯院付属状

この付属状は五通から成っていて、佐伯院の由来を伝えると共に、古代佐伯氏族の氏寺として京ノ都平城左京五条六坊に、佐伯氏一族によつて建立されたものである。一族には讃岐の弘法大師空海も関係している。なお、これらに関する古文書類は現在、重要文化財に指定され、京都随心院ズイシンインに伝えられているという。

天平の昔(七六七)海部ノ郡に豊後国司「佐伯久良麻呂」が着任したと記す豊日誌、豊後国志、並びに佐藤藏太郎著佐伯志では、久良麻呂が穂門郷に居住した年代と前述の佐伯院建立期(七六七―七七二)は同時代の史歴であるとし、「呼稱佐伯の地名考」にも、久良麻呂、佐伯院の二説が最も信ずるべき地名の根源説と考えられるとしている。

以上述べた佐伯荘に至る前時代の概略史を踏まえながら、佐伯本荘百二十町を考察するにあたり、荘園時代の推移としてその背景が不可欠と思われるので、知る限りの荘歴を述べることにする。

古代から律令時代を経て、平安時代(摂政、関白政治)が約四百年間続き、院政(平家の時代)後白川院の文治元年(一一八五)に平家が滅亡したあと、替わつて源頼朝が

鎌倉に幕府を樹立し、建仁三年(一一二〇)源実朝が暗殺されるまで源氏が政権を握った。その後北条氏(桓武平氏)が台頭して政権を担当し、鎌倉幕府を継承して元弘三年(一一三三)まで百三十年の間執権政治を行なった。

北条氏の滅亡後、南北朝時代を経て室町時代(源氏足利氏)に入り天正元年(一五七三)豊後国では大友宗麟の時代まで、二百三十年間にわたり室町幕府が続いた。其の間佐伯本荘の実態はどうであろうか。

▲ 安元二年(一一七六)戸穴庄が八条院目録に智恵光院御庄ミシヨウとして初見された。

▲ 源平時代の文治元年(一一八五)頃、緒方惟栄が兵船八十二艘を源氏に献上した。

▲ 建久元年(一一九一)頃、緒方惟栄が配流先上州沼田荘より佐伯荘に帰り居住したという。疑問？

▲ 承久の乱(一二二二)のとき鎌倉幕府二代執権北条義時方と、皇室上皇方との戦いで、北条方に味方した佐伯近将監が討死した。これは佐伯氏の系統かは疑問。

▲ 佐伯十三重塔(九仞ノ塔)建立、類型の塔が人吉庄にも建立(寛喜二年(一一六七)され、野津町には文永四年(一一二七)に九重塔が造立された。

▲ 文永一弘安の役(一一七四―一八二)佐伯氏一族が博多湾に出兵したという。

▲ 図田帳は弘安八年(一一八五)大友氏三代頼泰が鎌倉幕府に提出したという。以上佐伯荘の初見を「一族の興亡」より掲げてみたが外にもまだ多い。

中でも佐伯荘が開発されて行った発展途上で、上岡に造立された十三重塔は、中世佐伯荘に深く係わっていたものと考えられる。つまり造塔の主旨は、荘民の信仰の対象とする目的が大きく、今一つは造立者の権力を誇示するねらいも多分にあると思われる。思うに全国の荘園には、石仏、石造物、仏像、寺社が多く、建立、安置されている。つまり荘園制を論ずる過程で、仏教文化所産の究明は最大の課題ではないかと考える。なお、十三重塔に対する私論は後述する。

佐伯荘の初見

「別府大学刊行豊後国荘園公領史料」の中で、佐伯荘の初見を弘安八年とする「佐伯氏一族の興亡」は誤りで、正しくは文治年中(一一八五―一九〇)の宇佐宮飯殿カサヂチノイハササ地判指図ズが初見で、平安末期には存在した可能性があると反論している。また、戸穴庄と佐伯荘は前者から後者に変わっ

たとする継続的關係ではなく、同時的併存的關係であることは明らかである。つまり同莊異名であると莊園用語で論じている。「同莊異名」とは全体が一つの莊園で呼称が複数あるということであろう。しかし、果たして異論はないであろうか、私論として。

▲ 元暦元年(一一八四)緒方惟栄が宇佐宮の焼打説を前提とした仮殿地判指図は、明治八年に作成されたものという。明治初期は廃仏毀釈(ハイブツケンヤク)の盛んな時代で、逆に神格が急上昇した時が時だけに、宇佐八幡宮の格式も上がり、仮殿地判指図が昔のものから新しく作成されたものと考えられる。したがって、緒方惟栄焼打説に結び付ける大学刊行史の佐伯莊初見論は、信ずる内容が弱い。

▲ 宇佐宮が文治年中(一一八五―八九)に、一國平均役を豊後國に課したと大学刊行史は述べている。一國平均役とは「一國ごとに國衙領、莊園を問わず賦課される税または役目など」のことで、周知のとおり宇佐宮は豊前國の管内に在り、隣國の豊後國一円にまで税金並のものが課せられていたかどうか、しかも当時未開発地の多かった豊後國內で、佐伯もいまだ莊園かどうか

かはつきりとしていなかった時代だけに、一國平均役を課したとは信じ難い。もつともそれは幕命でなければできなかったと思うが、一方、当時戸穴庄は既に存在していたにも拘わらず、宇佐宮文書にその記載がない点も納得し難い。

▲ 緒方惟栄の実在性はともかく、その行動に信憑性を問う矛盾が多い。つまり平家物語、太平記、大友興発記などの軍記物に、琵琶法師、講釈師が語り物として注釈し、悲劇の主人公に仕立てて創作された可能性が強いことは否定できない。

以上の点をあげて別府大学刊行史の内容佐伯莊初見論に、他意のない私論を披歴した。

十三重ノ塔

別名九例(クウレイ)ノ塔ともいう。今一度この塔を全国に造立されている類型塔と比較し、検討して年代を割出し合わせて全般を推論したい。

中世佐伯を代表する仏教文化遺産として、かつ石造美術品としても学者に高く評価されているこの塔の型式(鎌倉前期)は、全国わずかに十一基を数えるのみという貴重なものである。初重軸部に陽刻された三尊仏様式は、

珍しく均整のとれたもので全体容姿は群を抜くという。ただ悔やまれるのは尾根を削平^{サクヘイ}したがため下方に移転し、往時の景観はない。移転時に塔下より発掘した旋彩^{センサイ}陶壺^{トラフコ}は、中世鎌倉初期の瀬戸焼という。この壺が骨壺かどうかは別として特定の人物の墓ではない。造塔の意義は納経、仏像塔として礼拝の対象に造立されたものである。

余談になるが伊豆を本館として起こった北条氏は、桓武平氏の流れで東海を征する強力な水軍の家系である。氏紋は当佐伯氏同様の「三ツ鱗」を本紋としている。幕府執権初代時政の先代は維^{ユイ}の付く名が多い。佐伯氏もまた、代々惟を通字としている。偶然の一致であろうか。本論に戻って十三重塔と類型の「人吉十三重塔、野津院九重塔」を参考に、以上の諸点を統合して造塔年代を推察すれば、すなわち北条氏執権二代義時（一二〇五—一二二四）の頃が、佐伯十三重ノ塔造立の時期とする見方が生まれてくる。

櫻野古仏

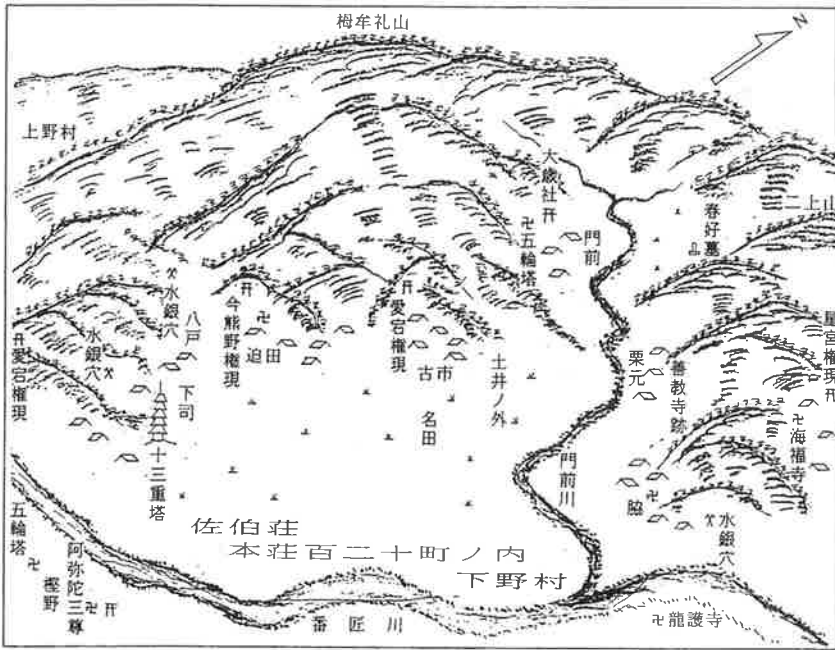
中林氏等によってたびたび紹介された仏教文化遺産のうち、櫻野永福庵の阿弥陀三尊仏と、佐伯本荘の関係を

見逃すことはできない。如来の定印を結ぶ親指が少々、腐蝕しているが素晴らしい古仏に変わりはない。この阿弥陀如来に衆生を救う自信の眼差^{メサ}しを彫りこんだ仏師は、果たして何者だろう、恐らく都の仏師、定朝系^{ジョウチョウキョウ}の者と推定する。また、平安・鎌倉前期の作といわれるこの仏像を、当時佐伯荘に持ち込んだ人物は誰か、その時代の国家支配と密接に関係を保つ権力者、すなわち領家・預所・地頭であったとしても間違いない。鎌倉時代を想定すればやはり北条氏一門を目安としなければいけないと思う。このことは後日の研究結果に委ねる。

中世荘園の開發は寺社の建立をはじめ、仏像、層塔^{ソウダ}、五輪塔、板碑、宝篋^{ホウキョウ}印塔^{インダウ}等の石造物を造立することによって、領家と地頭以下荘民とが結びつく要因ともなつた。

古市・上岡

中世荘園の大多数は平安後期から鎌倉前期、または中期に出現を見るといわれている。当佐伯荘も鎌倉時代に荘園化したことは中世史学者の一致した見解であるが、その開發の本貫地は古市・上岡一帯と見て当然であろう。



地名

田園を開くには水運の便を第一とするが、番匠川水系の山間部には今も中世村落の景観が点在する。その河口に位置する古市・上岡の周辺は、梅牟礼山に囲まれた南方一帯に開けた所、今は都市化が進んでいるが山から眺める景観は、中世も今もそう変わるものではない。前述の十三重塔、櫻野の阿弥陀三尊仏もこの地にある。

古文書は後世にも偽作されたが地名は変えられるものではない。古市・上岡地域に七百年前の中世を通じて伝わる主な地名を見ると、一ノ口・八戸・追田・名田・土井ノ内・脇・古市・本郷・屋敷・門前・下ノ村・門口等、時の荘民が名付けた由緒ある地名が多い。その地名と荘園の関係は次の機会に論及したい。

荘園史学者「故安田元久博士」は、日本史を少し深く学びたいと思うと古代の後期から中期全般にわたって必ず荘園という言葉がでてくる。そしてとくに、この荘園というものがわからないと、中世の殊に社会経済的な基盤をほとんど知ることができない。それほど中世史に占める比重が大きい荘園でありながら、その構造などが複雑多岐にわたっているために、荘園のことは容易に理解

されがたいようであると述べている。

私には少々、荷が過ぎることを、十分承知の上での記述である。ご理解戴ければ有難い。

参考文献 佐伯氏一族の興亡 佐伯市教育委員会編

豊後国史料 別府大学

日本荘園史 吉川弘文館

莊園 東京堂

日本の石造層塔 理工学社

